
土塊故郷行

みなきゆきなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

土塊故郷行

【Nコード】

N0467Z

【作者名】

みなきゆきなみ

【あらすじ】

様々な種族が共生する世界。故郷を失ったヌシ・白狼と、彼の民であった娘・ウズメは、新しい故郷を探し、大陸を旅していた。故郷の最後の民の幸せを願う、白狼の旅路の行方は、果たして。

（ サイトと同時掲載 ）

ブローグ 咆哮

母なる山が咆哮した。

地を突き崩すような震動が、白狼の住処である小さな祠を襲った。轟音が白銀の体毛を震わせる。預かっている赤子を己の使いであるオキナに任せ、白狼は石造りの鳥居の下に飛び出していた。

この数日降り続いている、針のような冷たい雨が、白狼の巨軀を容赦なく打ち据える。鬱蒼と木々が生い茂るこの場所からは、白狼が又シとして治める里の様子は見えなかった。

嫌な胸騒ぎが納まらなかった。

駆けた。ぬかるんだ山道が足先を冷やして感覚を奪い、はじけ飛んだ泥が美しい毛並みにこびり付いた。年老いた体は軋み、肺は酸素を求めて悲鳴を上げる。見開き、風に晒された鋭い瞳は、知性を持たぬ肉食獣のように血走っていた。荒い呼吸と共に、縋り付くような唸り声が鋭い牙の隙間から漏れる。

白狼が目指す先には、里を一望出来る切り立った崖があった。

ようやくの思いでそこに辿り着いた白狼は、警鐘のように激しい鼓動を落ち着けようと一息を吐いた。そして徐に首をもたげ、眼下の里を望もうと瞼を開く。

しかし、彼の知る里の姿は、そこにはなかった。

視界に入ったのは、里を呑み込んで唸りを上げる土色の濁流、ただそれだけだった。

戦慄する。体の冷えを唐突に意識した。瞬きを忘れた瞳が乾き、ちりちりと痛んだ。定まらない瞳孔が小刻みに震える。覚束ない呼吸が口元から漏れる。

里は、

里の者は、どうなった。

無謀にも飛び出そうとする前脚を、辛うじて理性が制止した。眼下で重く轟くような声を上げる土石流が、木々を岩を家を土を生き

物を、全て蹂躪して押し流していく。

白狼は吼えた。腹の底から沸き上がるような、体内に渦巻く感情を吐露するような、重く沈痛な慟哭だった。その巨大な躯体を冷雨の下に晒し、白銀の毛皮を泥土に染めて、振り絞るように白狼は哮った。　　されど、そんな悲痛に塗れた声を、濁流は容赦なく呑み込んでいく。

白狼は悔いた。大いなる自然を前にただ立ちつくすことしか出来ない、己の情けのなさを悔いた。どんなに声を張り上げても轟音に押し流されてしまう、己の小ささを悔いた。愛した里人を救うことの出来ない、己のあまりの無力さを悔いに悔いた。

衝動のまま、白狼は駆け出していた。

野を駆ける、山を駆ける。ぬかるんだ土壌の上を、倒れた巨木の上を、土を蹴り岩を蹴り材木を蹴って駆けに駆ける。体内に渦巻く衝動を、怒りを、悔しさを、情けなさを、払い吐き洗い流そうと、がむしゃらに脚を動かし続ける。ふと石に脚を取られ、泥濘の上に体を放り出す。それでもまた立ち上がり、拍子に口内に飛び込んだ土を吐き出して、白狼は再度走り出す。泥に塗れた毛皮に血が滲んでいた。雨に濡れ、ボロ雑巾のようになったその姿を、今や誰もかつてのヌシとは思えない。

感情に身を任せ、どれ程野山を駆けずりまわっただろうか。

雨はいつの間にか上がっていた。嘘のような静寂が訪れていた。疲労に蝕まれた体を引き摺り、朧気な瞳を彷徨わせていた白狼は、しじまの向こうに微かな泣き声を聞いた。

胡乱な顔をもたげ、重い脚を声の方角へと向ける。泥の色がする水たまりが跳ね、飛沫が毛皮に降り懸かる。されど、既にそのようなことを自覚する意識は残っていなかった。

泣き声は、白狼の住処である祠から聞こえていた。

幻聴かと思った。

されど、祠から出てきたオキナを見、白狼はその声が聞き違いではないことを悟った。

オキナの細い腕の中には、小さな赤子の姿があつた。里人に預けられていた、数ヶ月前に生まれたばかりの嬰兒だ。未だ自我を持たぬ赤子は、その存在を誇示するかの如く、肺を絞り上げるように声を張り上げていた。いつの間にか涙が零れていたことを、白狼はようやく自覚した。

未だ重く雲が立ちこめる空に、白狼は咆哮した。残酷なまでの静謐に包まれたかつての里に、染みいるように遠吠えが響き渡る。濃灰色の雲間から僅かな光が差し、荒れ果てた里を、崩れた里山を、生かされた白狼と赤子を照らしている。遠く彼方まで響くような声は、人の言う嗚咽と酷似していた。

このとき、白狼は決意したのだ。

この最後の民のために、己の余生を捧げようと。
それが、全てを失ったヌシに課された、生涯最後の役目だろうと。

頭上を仰ぐと、西南の空に仄白い半月が浮かんでいるのが映った。本日二回目に上がる月、通称『昼月』だ。あの月が東の空に沈むまではない、今夜の野宿先を見つけなければならぬ。白狼はそう思い、歩を進める脚をほんの僅かに急かした。

そんな彼の背の上で、土で出来た小さな身体を転がす少女　ウズメは、己の背に植わった木イチゴに手を伸ばし、磨き上げたルビィのような鮮赤色の実を一粒摘んだ。日光を反射し、瑞々しく輝く小さな実を、無造作に口に放り込む。薄い唇が見る見るうちに窄まるのを認め、彼女の隣を歩く強い白髪の子は、表情を全く変えぬまま口を開いた。白狼の背に乗るウズメでさえも更に見下ろしてしまふ程の長身が、彼女の上に影を落とす。

「酸いか」

「酸い！　おじじ様もお一つどうじゃ？」

「よい」

「むう、白狼様は如何じゃ？」

幼い顔立ちを歪め、ウズメは白狼に視線を投げかけた。白狼は微かに困ったような素振りを見せ、控えめに首を振って返す。

共に旅を始めて六年も経つのに、ウズメは未だ、白狼と白髪の子が同一の個体であることを理解出来ずにいる。

白狼と『おじじ様』と呼ばれた長い白髪の子　その名に違い、彼の外見は成人を過ぎた程の齢に見える　は、言わば傀儡師とその人形のような関係にある。傀儡師が白狼で、人形が男だ。又シとして人里を治める、白狼ら獣の一族は、民と意思疎通を図るため人型の使いを生み出し、使役する力を持つ。使いに自我はなく、その感覚は本体である獣と共有される。

何度そう伝えても、幼いウズメはその話を理解出来なかった。だから便宜上、白狼が操る人型の使いは『オキナ様』『おじじ様』、

白狼はそのまま『白狼様』と呼ばれることになっている。年若く見える男がジジイと呼ばれる所以は、外見の何倍もの時を生きている上、白狼が操るが故に口調や仕草が年寄りめいているからだろう。

「それにしてもおじじ様、いつになつたら次の里が見えてくるのじや？ ウズは疲れた。ずっと歩くだけの旅も悪くはないが、これだけ続くと飽いてしまう」

真っ赤に汚した口を尖らせて、ウズメは白狼の広い背にごろりと腹這いになった。白い毛先が鼻をくすぐるのか、むず痒そうに短い眉がひくついている。

「もう少し辛抱せぬか」

「またそれじゃ！ 辛抱辛抱辛抱辛抱、ウズはもう聞き飽いたっ」
握り拳で数度背を叩かれて、思わず白狼は呻き声を漏らした。

「前の里を発つてから四日、ウズはもう十分すぎる程辛抱したわ！ 山道には飽いたし野宿にも飽いた！ ウズはもつと色んなところを見たいのじゃ！ それに白狼様の毛皮はちくちくしてて寝づらいからもう嫌じゃ！」

毛皮の上質さには自信があつた白狼は、その言葉に少なからず凍り付く。だがしかし、彼女の言葉が恐らく勢いに任せた空言であることを、彼自身何となく察してもいた。

ウズメは今年で六歳になるが、その歳にしては子供っぽい一面があつた。彼女ら土の一族は八歳で成人を迎えるため、通常彼女ほどの歳になれば少なからずそれを意識するようになる。背に植えていた木イチゴや野ブドウをある日突然引っこ抜き、一丁前に異性を意識したアヤメやヒナゲシなどを根付かせてみたりして、周囲の大人に「あらあらこの子つたらませちゃってうふふ」等とからかわれるのはこの時期の誰もが通る道だ。

なのにウズメは、この歳になつても大好物の木イチゴを幾種類も身体に植えつけており、色気づく気配など有りはしない。身体の発達も遅れていて、同い年の子らは既に彼らの本体である土塊をほとんど肌で覆っているところ、彼女は未だ腕や足等に柔らかな土を覗

かせていたりするのだ。

その理由の一端は、自分にあるのだろうか。

そう思い、白狼は僅かに視線を落とす。

ともかく、そんな精神的にも身体的にも幼いウズメは、感情を制御するのが人一倍下手くそだった。特に腹を立てたとき、その悪癖は顕著になる。だから、彼女が白狼自慢の毛並みをちくちくするなどと宣ったのも、興奮に我を忘れてついぼろりと出任せを口走ってしまっただけに違いない。そうに違いないのだ。

念のためにオキナの指先で毛皮の感触を確かめながら、しかしと白狼は頭上を仰いだ。

彼女の言い分も尤もだった。前の里を発ってから四日、ずっと鬱蒼とした木々に覆われた山道を歩いていることに、些か気が滅入ってはいた。踏み鳴らされていない地面は足を痛ませるし、起伏に富んだ険路は必要以上に体力を削ぐ。昼間はほんのりと汗ばむような気温も、夜にはがくりと下がり、二人と一匹が身を寄せ合って眠っても薄寒さを感じる程だった。

「確かに、この行程は些か辛いな」

「じゃろう!？」

目を輝かせてがばりと上体を起こすウズメに、しかしオキナは冷淡な視線を送った。

「されど辛抱する以外に選択肢はあるまい。儂はただのヌシの落ち零れ、まさか次の里を呼び寄せるなどという馬鹿げた芸当が出来るとも思っておるのか」

「うつ、……ま、まあそうなんじゃがっ」

「それにこの我が儘娘は、白狼めのもふもふの毛並みを気に入らぬと言うのか。ならばこの先ずっと、白狼の背から下りて自分の足で歩いてもらうても構わんのだがなあ」

「……分かった! おじじ様と白狼様の好きにすれば良かる! ウズメはもう知らぬっ」

じたばたと捨て台詞を吐いて、ぼすんとウズメは白狼の銀系に顔

を埋めた。悔しそうな呻きが僅かな顔の隙間から漏れている。

オキナの視界を使い、白狼は己の背面で横たわるウズメの、その土塊で出来た小さな体を見据えた。腰に届きそうな程に長い、白砂を彷彿とさせる色合いの髪と、その下に覗く若葉色の衣。白い肌の合間からは、ところどころ黄土色の土が顔を出している。彼女の本体である土の上には、棘のついた木イチゴの枝と小さな雑草、それに薬草の類が幾本か根付いていた。琥珀色の丸い瞳は、顔を伏せているため今は見えない。

やはり、同年代の子供に比べ、身体の発達が極端に遅いように見える。生まれた土地の土をほとんど取り込めなかったことが災いしたか、或いは旅に出て一定の里に留まっていけないのがいけないのか。白狼は懸念に眉を潜ませる。

ウズメは、かつて白狼が治めていた里に生まれた娘だった。

そしてその里は、今はもうない。

忘れもしない、六年前のあの夜。三日三晩続いた豪雨の末、母なる里山は山崩れを起こし、小さな里は敢えなくそれに呑み込まれたのだ。

ウズメら土の一族の本体は、その名が示す通り土塊である。その為、彼らは土に取り込まればそのうちにそれと同化してしまう。故に土石流に呑み込まれた里の民は、皆が皆泥と濁流の中に埋もれ果ててしまったのだ。

生き残ったのは、里から離れた白狼の祠に預けられていた、生まれたばかりの赤子。すなわちウズメ、ただ一人だった。以来二人と一匹は、朽ち果てた里から離れ、あてのない旅を続けている。

しかしやはり、このままではいけない。このまま旅を続けていては、元々土着の民であるウズメの成長に支障を来してしまう。ウズメのために、彼女が移り住むことが出来る里を、白狼は長い間探し求めているのだった。

繁茂する木立の彼方から、一筋の光が差した。延々と続く山道も終わるか、それともただの木々の切れ間か。白狼は一つ息をつき、

歩を進める足に力を込めた。

そのときだった。

「あら、珍しい。獣の一族と土の一族が旅をしてるなんて、始めて見たわ」

突如上空から聞こえてきた幼い声に、白狼は意識を奪われる。

オキナの首を回転させ、背後の空を仰ぐ。視界に入ってきたのは、純白の日傘を差し、こちらを見下ろすようにして宙に浮かんでいる、一人の少女だった。

歳の頃はウズメより一つか二つを多く数える程度だろうか。未だ幼さを残す顔立ちに、勝ち気そうな水色の吊り目が眩い。背後からの風に煽られて揺れる長髪は、真夏の空のような鮮烈な青色をしていた。頭の頂きから二本、髪と同色の、されどそれにしては太い糸が垂れ下がっているのを見、白狼はその怪訝げな表情を正す。

気流を読む二本の触覚は、雲の一族の特徴だった。

彼女の声に反応し、ウズメは威勢よく上体を起こす。頭上に少女が浮かんでいるという光景に、一瞬目を白黒させるも、どうやら彼女も少女が雲の一族であると理解したようだ。その琥珀色の瞳が、見る見るうちに好奇心に溢れた輝きを帯びてくる。

そんな子供らしい落ち着かない仕草に、雲の一族の少女は少なからず興味を抱いたらしい。少女は強気そうな笑みを浮かべながら、日傘を回してウズメの前方へと降下する。

「あら、可愛いお嬢ちゃんね。木イチゴを植えてるってことは、四歳くらい？」

「しつ失礼な！ ウズはもう六歳じゃ！」

ばんばんと平手で白狼の背を打ちながら、ウズメは噛みつくようにして抗議した。その言葉が全くもって意外だったのか、少女は目を数度瞬かせ、取り繕うように笑顔を作る。

「そ、そうなの？ それにしてはちっちゃいように見えるけど……旅人であることに関係があるのかしら。じっくり話を聞かせてもらいたいわ。もし行き先があれば、私たちの旅団に同行しない？」

「旅団？」

「飛島旅団、つて言葉をご存知かしら？」

表情をそのままに小首を傾げる少女に、ウズメは軽く首を振って応ずる。その隣で、沈黙を保ち続けていたオキナが徐に口を開いた。「飛島を風に吹かせて旅をする、行商人の一段のことだろう」

「あらお兄さん、博識ね」

オキナの低い声に、少女は嬉しそうに鮮やかな水色の瞳を細めた。こんな形でも自分は長い時を生きた老爺であり、その上元とは言え又シである。里に関係のないことでも、ある程度学はあるつもりだと、白狼は小さく息を切った。

「そう、私たちは飛島と共に世界中を旅する行商人。ただ旅をするだけだとつまらないから、時々気に入った人を目的地まで運んであげたりもするの。あなた達なら、旅団の皆も喜んでくれると思うわ。私たちはこれから東へ向かうのだけど、良ければご一緒しないかしら？」

元々、行くあてもなく放浪する旅だ。行き先など特に決まってはいない。

「行きたい！！」

間髪入れず返答したウズメに、少女は満足げに首肯する。

「ですって。お兄さんはどうかしら？」

「……旅費が気になるな。儂らには纏まって払える銭がない」

「あら、そんなもの要らないわよ。私たちはお客さんに娯楽を求めている訳だし。旅の面白い話でも聞かせてもらえたら、それだけで充分だわ」

日傘を斜めに傾け、少女は風を受けて高度を上げる。常人と比べると頭一つは抜きん出るオキナの長身に視線を合わせるようにして、少女は衣服の裾をはためかせながら上体を傾げた。

「さて、如何かしら？」

迷う要素はなかった。それに、各地を旅している旅団の面々と触れあえるのならば、己の旅の目的に、一歩近付くことが出来るかも

しない。

「……ならば、お言葉に甘えさせてもらおう」

「やったー！ 空の旅じゃ！！ 退屈な山道を耐えた甲斐があった！」

仄かに相好を崩す白狼の上で、ウズメはその小さな両手を空に掲げてみせるのだった。

突風を日傘で捕らえて浮き上がりながら、少女はその細い指先を胸元に当てる。

「ご同行ありがとう。私は飛鳥旅団の雇われ雲編み師、アナンよ。正確には、アナン・ワラークラ・ア・ドウオルク。よろしくね」

名の後に一族名をつけるのは、西の大陸に流布する神光教の習慣である。西の大陸被れの少女は、自信に満ちた笑みを浮かべたまま、軽く低頭してみせたのだった。

002 地から離れて

旅団の面々が生活を営むのは、編んだ雲を以て進行方向を操る、小さな飛島の上だった。

飛島とは、成長すると浮遊する性質を持つ、飛苔という苔の一種が、周囲の土地を巻き込んで空に浮かび上がったものを指す。旅団が利用している飛島は、建物が四つと広場が一つでいっぱいはいになってしまふ程度の面積しか持たなかった。

その広場の一角で、白狼は煉瓦に腹這いになって無造作に脚を放り出している。日光により地面に蓄積された温度が、じわりと腹を温める。顔を上げ、前方を仰ぎ見れば、そこには崖のように切り立つ飛島の淵が覗いている。その先には、薄く棚引く白雲と、青々とした雄大な山脈が一望出来た。

白狼の隣にはオキナが控えており、古びた解き櫛で白狼の毛を梳いていた。のんびりと毛並みの手入れをする一時が、白狼にとって最も至福な瞬間だった。それに絶景も加わった今、白狼の心は文句なしの充足感に満たされている。

ウズメは先程の雲編み師の少女に連れられ、飛島の周囲で雲を編んで遊んでいるらしい。遥か上空から、甲高い笑い声が聞こえてくる。

「おや白狼さん、気持ちよさそうですね」

いつの間にか、背後に影が差していた。

旅団の一員である、光の一族の青年だ。名をスヴェート・ヴィガラディウス・ア・ヤーと言うらしい。ア・ヤーと末尾につけるからには、彼は西の大陸の出身であり、神光教の信徒であり、しかも教会所属の光飼いであるようだった。神光教は旅を愛し、慈愛を謳うと聞き及ぶが、スヴェートは愛を語るにはほど遠い、抑揚のない言葉を話す、実に無愛想な青年だった。

スヴェートはその短いくすんだ金糸を揺らし、半目がちの群青の

瞳を伏せて白狼とオキナを見下ろしていた。神光教のシンボルである尖った正十字を各所に散りばめた、白妙のローブが否応にも目を奪う。

満足げに頷く白狼に、スヴェートはほんの僅かに表情を弛緩させた。良いですか？ と言了承を取り、彼はオキナの隣に腰を下ろす。言語の違う西の大陸の出身だからだろうか、言葉はこなれた感じがするものの、その発音はどこかぎこちない。

「それにしても、こちらの大陸に来てから一年ほど経ちますが、獣の一族を乗せたのはこれが初めてです。普段乗ってくるのは、アナと同じ雲の一族や泡の一族が大半で」

スヴェートの視線は、流線型の軌跡を描き、青空の上で雲を操るアナンとウズメに向けられていた。それを徐にオキナへと送り、彼は淡々と言葉を紡ぐ。

「樹の一族、水の一族、そして貴方のような獣の一族は、普通は又シとしてそれぞれの土地に座しているものと聞きます。それがどうして旅人に」

慣れた質問だった。白狼は顔を伏せ、苦く笑むような表情を作る。「何、守るべき里を失っただけだ」

あまりにさりとしたオキナの回答に、スヴェートはその三白眼の気のある瞳を数度瞬かせた。困惑するような逡巡。そして彼はばつが悪そうに頭を掻いて、

「や、これはとんだ失礼を」

「構わぬ、慣れておる」

仮にも六年間、里を離れて様々な土地を点々としてきたのだ。好奇の目に晒されることは間々あったし、そんな視線を送る輩は二言目には「どうして旅なんかを」と言うことも知っていた。その対応の方法など、旅を始めてから半年と経たぬ間に理解していたのだ。

「飛島に乗せていただいた礼だ。訊きたいことがあれば何とでも訊くが良い」

「では、不躰ながら」

半目になった濃い群青の瞳を向け、スヴェートは淡泊に口を開く。
この光飼い、陰気な見た目の割には案外と図太いらしい。

「土の一族も、普通は生まれ故郷から出ることが無いようで、旅人として生計を立てている者は見たことがありません。それなのに、ウズメさんは何故旅人になったのですか」

刹那答えに詰まる、

「……ウズメは、自らの意志で旅人になった訳ではないのだ」

毛並みの手入れを続ける手を止め、オキナは白狼と同じ紅の瞳をスヴェートへ向けた。言葉を続けるべきか束の間躊躇するも、その臆面もない様子にこの男なら気にしないだろうと踏む。

「あれは、儂が治めていた里の生き残りでな。互いに互いがおらぬと生き延びることが出来ないのだ」

「成程。見たところウズメさんはかなり幼いようですし、確かに一人で生計を立てることは不可能でしょうね」

案の定、スヴェートは大した反応を見せなかった。納得するように数度頷いた彼に、いやと白狼は首を振る。

「それだけではないのだ。種族上の特性でな。ヌシは、治める土地の土が無ければ生き延びることが出来ぬ。そして、土の一族は、生まれ故郷におるか、或いはその匂いがする者が傍にいないければ形を保つことが出来んのだ。それ故、傍におらぬと二人共が生命維持に支障を来す」

土の一族は、故郷の土から生まれ、その土を取り込みながら育つ。故にその故郷に寄り添って生きることを強いられる。彼らと共生するヌシも同じで、その土地に座す獣や沼、樹などを依り代とし、土の一族と共に生きる彼らは、彼らを育んだ土の匂いから離れると途端に弱ってしまうのだ。

無論スヴェートの言うように、一人で生きていく器量を持たないウズメを放っておく訳にはいけないという理由もあった。だがそれ以上に、土に依存して生きる土の種族と、土を治めるヌシの特性は、二人が共に旅を続ける根源となっていたのだ。

「……それはそれは。ならば二人で旅を続けるしかない、そういうことですか」

「無論、やむ方なしに旅を続けている訳ではないがな。旅の目的も、確かにある」

白狼がそう呟いた瞬間、上空から聞こえる歓声が大きくなった。

二人は釣られて蒼天を仰ぎ見る。

そこには、白煙の如き軌跡を描き、深い青碧の空を背景に、壮大な鬼ごっこを繰り広げるウズメとアナの姿があった。雲編みというのは、ただ単純に雲を自在に作り出して操ることだと思っていたが、どうやらその認識は誤っていたらしい。雲の密度も操作しているのだろうか、二人は各々が編んだ雲の上に乗る、空を自在に駆けまわっている。

「雲は、気質が流れ者でないと上手く操ることが出来ないものらしいですよ」

雲は流れるものですから、とスヴェートはぽつりと呟いた。

「ウズメさんは大層上手に雲を操られる。土の一族としては大変珍しい。きっと、幼い頃から旅を続けてこられたからなんでしょう」

囁くような呟きは、されど白狼の鼓膜に鋭く反響した。

「……本当は、」

無意識のうちに口が動いた。

「ウズメにも、里の暮らしをさせたいのだがな。土の一族は本来、一所に定住して暮らすもの。理に反するのは、やはりおかしかろう。他の子に比べ成長が遅いのも、その証拠だろうて」

オキナの口を借りた白狼の言葉に、スヴェートは首を傾げていた。「そうでしょうか。あれ程流れの気質を持っている子なのだから、無理に定住させなくとも良いような気がしますが。きっと本人も、今の暮らしに慣れているのでしょう」

「いや、あれもきつと、本心ではどこか一所に暮らしたいと思うておると思うのだ」

無邪気に空を駆けるウズメから目を落とし、白狼は一つ息をつい

た。

「ウズメは時折、早うこの里を発とうと急かすことがある」

思い出す。四日前、とある樹の一族の又シが治める里を発ったときの話だ。

風に揺られる色鮮やかな水稻と、穏やかな性格の里人達が心地良い里だった。ウズメ自身もその里を気に入ったと笑顔で話していたはずだった。だがしかし、二晩を過ごした日の朝、彼女は唐突に里を発ちたいとぐずりだしたのだ。

「あれは、一所に長居するのを極端に嫌うのだ。儂にはそれが、里心をつけるのを恐れているようにしか見えぬ」

駄々をこねるウズメの、その悲しげな表情を浮かべながら、オキナはぼつりと言う。

「それは、彼女が根っからの旅人だからと言うことではないのですか」

「恐らく違う。もしウズメが根っからの旅人であるなら、里心がつくことなどなかるう。一所に長居しても平気なはずであろう」

現に白狼自身、里心がつくことへの不安に道中いつも怯えていた。元々自分達は土着の民であるのだ、ごく自然に里に定住し、暮らしている人々を見、羨まないはずがない。老成している白狼でさえそうなのだ、幼いウズメの不安は、想像して余りあるだろう。

「あれはやはり土着の民、土の一族の娘なのだ。やはりウズメは、適した里を見つけてそこで暮らした方が良い」

「成る程。それが、あなたの方の旅の目的という訳ですか」

スヴェートの言葉に、オキナは確固とした首肯を返した。

徐に立ち上がり、白狼はその弛みきった巨軀を伸ばす。決然としたその瞳は、何も知らず笑い声を上げているウズメに向けられていた。

「しかし、気になることがあるのですが」

その本心が読み取れない、薄い表情を浮かべたまま、スヴェートはふと口を開いた。純白のローブが風に揺れ、衣擦れの音を立てる。

「この大陸の人から、又シが二人以上同じ土地に留まることは出来ない」と聞いたのですが。白狼さんは又シ『だった』ので、他の又シのいる里に留まることは出来るということですか？」

その言葉に、白狼は沈黙する。

又シが一つの里に一人しか留まることが出来ないのは、この世の中の理だった。里長が一つの里に一人しか存在しないと原理は同じだ。頂点の権力や頭脳が分散すれば、それが治める里人は、少なからず混乱してしまう。

「いや、元であつても又シは又シ、少しの間邪魔をすることは出来るが、基本的に一所に長居することは出来ぬ」

『元』又シであつても、どこかの里に留まれば、いずれ現又シとの間で民心が分散し里の内に争いが起こってしまう。故に白狼は、どこかの里に留まることが出来ないのだ。

そう断言するオキナに、スヴェートは不思議そうな表情を浮かべた。

「そして、先程の話の通り、ウズメさんと白狼さんは性質上離れて過ごすことが出来ない」と言うことは、ウズメさんがどこかに定住しようと思つても、一所に暮らすことが出来ない白狼さんがいる以上、それは難しいのではないですか」

淡々としたスヴェートの口調に、オキナは口を噤んだ。

そうなのだ、幾ら白狼がウズメを定住させることを望んでも、二人の種族上の性質がそれを許しはしない。又シがいない里など、土の一族が暮らす一帯ではあるはずがない。それはつまり、白狼とウズメの性質上、二人が定住し得る里など存在しないという事実を示していた。

難しい旅路であるということは、重々承知している。されどこの世の何処かには、又シが亡くなって治める者がいなくなった里もあるかもしれない。また違う共生の形を見出している里もあるかもしれない。そんな可能性がある限り、白狼らは旅を続けるしかないのだ。

「……この広い世界のどこかに、ウズメの故郷となるべき里があるはずだ。僕はそう信じてやまぬ。そんな里を見つけてやるのが、僕の又シとしての最後の仕事だろう」

四駆を広場の石畳の上に張り、雲の切れ間に見える遙か下界を見下ろしながら、白狼はオキナの口を借りてそう告げた。

そのとき、下界の視線に気付いたか、雲に跨って空を疾駆していたウズメがふとこちらを一瞥した。楽しげに片手を振って、二人と一匹の元へと急降下してくる。

「おじ様！ 白狼様！ これは実に楽しいぞ！ やって見ぬか？」

器用にオキナの眼前で雲を停止させ、ウズメは落下するのではないかと思う程勢いよく上体を乗り出した。喜色満面の表情は、こちらが狼狽してしまう程に輝いている。

その晴れやかな表情に、オキナは静かに苦笑を浮かべ、

「よい。老体にはきつかるうし、話を聞くだに僕には到底難しいよ
うなのでな」

「どうしてじゃ？ ウズにも簡単に出来たのじゃぞ？」

そう唇を尖らせて、ウズメは片手に持つ銀鎖を突き出してみせた。細く連なる四本の鎖には、薄い煙を吐く銀の球と小さな鈴がぶら下げられている。雲香炉、と呼ぶらしい。これに雲を凝縮させた粒を入れ、左右に振ることで雲を編むのだ。

「僕は老いぼれな分、お前さんのように新しいことにはついていけないのでな」

「なんじゃそれは！ すごく楽しいのに！ おじ様は頭が固うて駄目じゃ！」

ふん、と勢いよく顔を背け、ウズメは手中の鎖を小刻みに振り始めた。香炉から白煙が漏れ出、凝縮されてゆく。

「あんだ、本当に土の一族？ そんな手つき、普通初心者は出来ないわよ」

背後からアナンの声が聞こえ、ウズメはふと振り返った。ウズメ

を追って、いつの間にかアナンも飛鳥の上へ降りてきていたらしい。雲上に横に腰を掛ける姿は、流石雲の一族と言うべきか、実に様になっていた。しかしその表情はどこか不機嫌さを帯びており、きつい印象を与えがちな瞳が更につり上がっている。

そうなのか？ とウズメは不思議そうに小首を傾げる。そんな彼女の様子に、アナンは呆れたように首を振った。二本の触角が、どこか居心地悪そうに揺れる。

「誇り高き雲の一族の雲編みがそんな簡単に……、まあいいわ。そうだ、折角なんだし、その香炉貴女にあげるわよ」

「え！？ いいのか！？」

花が開いたかのように顔を綻ばせたウズメに、アナンは肩を竦めて首肯した。

「……良いのか？ 高価なものだろう？」

それに疑問を唱えたのは、白狼操るオキナだった。気難しげに眉間に皺を寄せ、彼は僅かな仕草でアナンを見やる。旅費なしで旅団に同行させてもらっているだけでも頭が下がるのに、これ以上好意に甘えるわけにはいかない。

「いいのよ、どうせ幾つも持つてるんだし。それに、あんな才能、埋めてしまうなんて勿体ないわ。雲編み師にスカウトしたいくらいよ。……すっごく悔しいけどね」

アナンの口調は悔しさを漂わすも、まるで躊躇いを抱いていないように思えた。しばし逡巡し、白狼は深く低頭して「かたじけないと返す。いいのよ、と平手を振るアナンの表情は、実にあっけらかんとしていた。

「おや、そろそろ昼月が沈むようです」

緩慢な仕草で立ち上がりながら、静かにスヴェートはそう告げた。東の空を見やれば、先程まで灰白い姿を見せていた月が、山の端にその姿を半ばまで隠している。

「もつじき日も暮れるでしょう。私は光を解放してきます。アナン、そろそろ客人の分も夕食の用意を、と厨房に伝えてきて下さい」

スヴェートの言葉に、了解とアナンは返す。どこか釈然としない息をついて、彼女は雲香炉の上蓋を開き、雲の素らしい爪先程の大きさの粒を摘んだ。香炉の後始末をしているのだろう。

「二人は食事が出来るまで、宿舎で待つてね。私たちは仕事に戻るから」

「あいわかった！」

見よう見まねで雲香炉を片づけながら、ウズメはその小さな八重歯をも見せる勢いで声を上げた。この旅団は西の大陸出身の者が多いので、食事も西のものになると聞いていたのだ。それが楽しみなのだろう、弾んだ鼻歌を奏でる様子は、傍目に見るだけでも愉快げだった。

ウズメが旅を楽しんでいる様子は、普段から見慣れたものだったが、だがしかし、と白狼は僅かに瞳を伏せ、どこか憂いだ面持ちで彼女を見つめていた。

003 導きの下

日が沈むと、飛島の周囲は底知れぬ闇の帳に覆われる。

まるで、空気そのものが色を持ち、光を遮断しているかのようなのだ。漆黒の濃霧に包まれていると言われても、きつと疑問に思うことはないだろう。まるで島が世界から切り離されてしまったのではと錯覚するほどに、飛島の四方は虚無に満ちていた。

そして、その空虚を晴らすように、上空から硝子の砂を散らすような音が聞こえていた。

音の主は、闇に覆われた飛島を煌々と照らす、スヴェート操る『光』であった。明々とした五連の光球は、青白い尾を引き、一定の距離を保って飛島に寄り添っている。

「これが西の大陸の光飼いか。話には聞いていたが、実際に見るのは始めてだ」

「光導師とお呼び下さい。光は神聖なる先祖の魂です、それを飼うなんてとんでもない」

オキナの感嘆の声に、スヴェートは無表情のままに言葉を紡いだ。広場の長椅子に腰掛ける二人と、その下で巨体を伏せる一匹の視界の中では、大口を開けたウズメが光に両手を伸ばすようにしてはしゃいでいる。

「これが光の一族がそう呼ばれる所以か！ 光の一族の魂は、死すと光となるのじゃない？」

ウズメのはしゃいだような声音に、スヴェートは静かに首肯する。「その通り。人としての死を迎え、肉体と切り離された魂は、光として空を漂います。そして『光』は徐々に徐々に天空の彼方へと昇っていく、やがて星となると言い伝えられています」

スヴェートの話に聞き覚えはあった。確か、彼が進行するらしい神光教の教えの一つだ。確かに、虚空の彼方から地上を見下ろす星々は、飛島の上空に浮かんでいる光と、その大きさ以外何ら変わら

ぬ形状をしていた。

スヴェートの言葉に、ウズメは感動したのか目を煌めかせる。

「すごい！ 世界には色んな種族があり、色んな文化があるんじゃないのー！」

「そうでしょう。ウズメさんは、旅の楽しみをよく分かっているんじゃない？」

相変わらずスヴェートの表情は薄かったが、よく見ればそれもとことなく弛緩しているように見えた。スヴェートは再度夜空を仰ぐ。「我ら光の一族、特に神光教を信仰する者は、『光』を導きながら世を旅することを最上の喜びとします。我々の先祖である星は、大陸のどこを渡り歩いて、同じように並んで地上を見守ってくださっているでしょう。それはつまり、先祖にとって、この地上全てが故郷であるということなのです。地上にいながら先祖と同じ境地に達するため、我らは旅をするのです」

「成る程！」

輝くような声を上げ、頭部がぼろりと落ちるのではと思うほどの勢いでウズメは首肯する。その隣で、オキナは口を結び難解な表情を浮かべていた。

「……さっぱり分からぬ」

「白狼様には、僕らの文化は分からないかもしれませんが。何しろ、東の土着の民でいらっしやいますから」

「ウズメもそうであるはずなのだがな」

「おじ様は頭がお堅すぎるのじゃ！ そんなこつちこちじゃ、分かるものも分からぬ！」

長椅子に腰掛けるオキナの上にふんぞり返るように、ウズメは腕を組んで上体を張った。ひび割れたような薄い笑顔を浮かべ、オキナは一つ咳払いする。

「言いおるのうこの生意気娘。このおじじめに説教か」

「だってそうじゃる！ 前々から思っておったんじゃが、おじ様はおじじ様の考えに引きこもりすぎじゃ！」

「お主の何倍も生きているこのおじじに、不敵なことを言いおるのう」

「だって本当のことじゃ！　むしろおじじ様は、長生きだからこそ石頭になっておる！」

いがみ合う二人を、スヴェートは我関せずと言った趣で見やつている。ウズメの言葉に微かに頷いている辺り、どうも彼女と相通じるところがあるようだが、白狼にはその心情がとんと理解できなかった。

「あらウズメちゃん、まだ起きてたの？」

そんな三人と一匹に、上空から声がかかる。そんなところから声を発する者は、考える必要もなく一人しかいない。

とつくに日も暮れているのに、昼間と同じ日傘を悠々と差しながら、アナンはその強気そうな瞳を瞬かせて首を傾げていた。

「スヴェートが説教でも聞かせていたのかしら。もう夜月が昇るから、そろそろ寝ないと」

ほら、と彼方へと瞳を向けるアナンの視線の先では、本日三度目に上がる半月、通称『夜月』が稜線から姿を覗かせていた。

「ええっ、ウズはもう少し起きていたい！　スヴェート様のお話は面白いんじゃない！」

「そういうことは、背中にユリの一本でも根付かせてから言いなさい。木イチゴをついばんでるようなお子様は、夜月が昇ったら寝ないといけないの」

流石東の大陸の一族と言うべきか、アナンは土の一族の成人事情も熟知しているらしい。木イチゴの棘のついた蔦を全身に絡ませるウズメは、うっと一言口を噤んでしまう。

「白狼さん、この子先に宿舎へ連れていくわよ。いいわね？」

「よろしく頼む」

「嫌じゃー！　ウズはもつとお話を聞きたいんじゃない！」

じたばたと手足を振り回す姿に、オキナは一寸顔を顰めた。そのままつかつかと歩み寄り、ウズメに視線を揃えるよう腰を曲げて言

う。

「いいかウズメ、儂らはお主のことを思って早う寝よう促してやるのだ」

「嘘じゃ！ どうせ意地悪じゃ！」

「そんなはずがあるか。お主はお主が思うより幼く、それ故体を上手く管理することが出来ぬ。夜更かしなどして体を壊したらどうするのだ」

相変わらず温かみが薄い口調だったが、誠心からの言葉はどうやら幼いウズメにも通じたらしい。彼女はうぐ、と息を吞んで、仕方がないとばかりに頷く。そんな彼女の頭を軽く撫で、オキナは「良い子だ」と微笑むのだった。

アナンに案内され宿舎へと向かっていくウズメの後ろ姿を見つめながら、ぽつりとスヴェートは零す。

「白狼さんはやはり、あの子のことを大切にしているんですね」

「それはそうだろう、最後の里人なのだ、儂が守ってやらずに如何する」

仏頂面でそう返すオキナに、スヴェートは視線を寄越さずに頷いた。

そう言えば、とふと白狼は首を起こす。

「そうだ、スヴェート殿、お主らに渡したいものがあつたのだ」

白狼はその脚を伸ばし、長椅子の影から這いだした。置物のように座ったオキナの腰にその頭部を寄越し、鋭利な牙でその腰に結わえ付けられていた深紅の紐を引きちぎる。

白狼がくわえた紐の先には、白狼の巨大な鼻先ほどの大きさの、一つの古びた瓢があつた。

「旅に同行させていただき、ウズメの面倒も見ていただいた礼だ。ご笑納いただきたい」

そう言つて差し出した瓢を、スヴェートは相変わらずの淡泊な表情で受け取った。東の大陸で、瓢に入れて持ち運ぶものと言えば、一つしかない。彼はそれを熟知しているらしく、瓢の口を開けて中

を覗いた。

「貴方の土地の地酒ですか」

「うむ。儂の祠に納めていたものでな。これだけは被害に遭わなん
だので、微量ながら持ち出すことが出来た」

「なになに？ それなあに？」

いつの間にか戻ってきていたらしいアナンが、スヴェートの背後
からその身を覗かせた。日傘を閉じ、長椅子の後方に着地しながら、
好奇心旺盛な瞳を伺わせている。

「白狼さんの土地の地酒をいただいたんですよ。後で皆でいただき
ましょう」

「わあ、ありがとう！ 土の一族のお酒って美味しいのよね、里に
よって個性があるし」

弾んだ口調でそういうアナンに、白狼は驚いたように多少目を見
開いた。年端もいかぬ少女に見えるが、見かけによらず酒好きらし
い。そう言えば雲の一族は風に浮き上がれる程の軽い体重を維持す
るため、成長が遅いと聞いたことがある。この少女、見かけは稚い
が、実は結構な年齢なのかもしれない。

そんな白狼の思考を裏付けるように、アナンは躊躇いなく瓢の栓
を開き中を覗き見た。細い口から漂ってくる芳醇な香りを肺に満た
す。

途端、その丸い瞳を瞬かせ、アナンはきょとんと首を傾げた。

「あら、このお酒の香り、私知ってるわ。どこかで飲んだことがあ
る」

「何と、東の酒は、里によって完全に風味が違うと聞きますが。そ
んな偶然、あるんですね」

スヴェートのその言葉に、どこか心がざわついた。怪訝に潜む眉
を抑え、オキナは口を開く。

「……いや、普通は起こらぬ。アナン、お主はいつ旅を始めた？」
「え？ 四年前だけど」

不思議そうなアナンの声に、白狼の鼓動が速まった。

四年前、と言うことは白狼の里は既に流されてしまった後だ。つまり、彼女が呑んだその酒は、白狼の里のものではない。それなのに風味が似通っている、その事実が指す答えは、

「その酒、どこで飲んだか覚えておるか？」

「ちよつと待つてよ。確か、この旅団に入る前だった。あの時は東の飛島に暮らしてて……」

額に手先を当てて考え込んでいたアナンは、やがて思いついたのか顔を上げる。

「思い出したわ、グナウー河の中流の里よ。水の一族のヌシが治めてて、何だか色んな匂いが混ざった里で印象的だったからよく覚えてる」

臆気な期待が、輪郭を帯びた。

グナウー河はこの地方に横たわる大河だ。この地方を歩いていれば、その地理の目安として彼の河の名はよく耳にする。そしてその河の名は、白狼にとっても馴染みの深いものであった。

浮つき、覚束なくなる思考を抑制させながら、白狼は続く言葉を探る。

「……儂のかつての里は、グナウー河の上流にあった」

その言葉に、陰気な顔を疑問に曇らせていたスヴェートが、はつとオキナの方へと振り返った。その瞳には、白狼が得たものと同じ確信が浮かんでいる。

「それは、もしかして、」

気もそぞろな口調に、オキナは重々しく首肯する。

普通、それぞれの里の地酒の風味が似ることなどありはしない。近寄った里ならまだしも、それが全く離れた場所のものなら尚更のことだ。ならば、その似通った酒を生み出した里に、同じ人間が住んでいると考えた方が自然である。

つまり、アナンの話が示唆している事実。それは、流された白狼の里の者が、下流の里のヌシに拾われて共に暮らしているという、夢のように覚束ない可能性だった。

頼りない息が漏れるのを自覚する。旅を始め、各地を彷徨って六年。まさかそんな話がいきなり飛び込んでくるとは、夢見はすれど決して現実にはならないと思っていた。

行くあてのない旅の終わりが、ようやくその輪郭を表したのだ。

希望に鼓動を速くする白狼とオキナを、アナンは不思議そうな面持ちで交互に見やる。

「アナン、その里には、ここからどう行けば最も近い」

「ええと、そうね、今の場所からはかなり近いはずだわ。明日の朝にグナウー河を越える予定だから、そのときに降りて河に沿って東に向かえば、半日も歩けば着くと思う」

思ったより速い。期待に沈黙する白狼に、スヴェートは淡泊に言葉をかける。

「……短い旅となりましたが、よろしければ、明日の朝お二人を下ろしましょうか？」

「かたじけない。そうしていただけると有り難い」

オキナは夢うつつのような首肯を返す。それを見て、スヴェートは穏やかに頷いた。

白狼の胸は高鳴る。興奮に顔を熱くする彼の頭上では、瞬く星々が静かに下界を見下ろしていた。

004 愛しき里人

案の定ウズメは反対した。もう少し飛島に乗っていたいと猛烈に抗議した。長居は嫌がるくせに、彼女の基準に達するまでは、ウズメはとことん一所を堪能したいらしい。

言葉でねじ伏せるのが不可能だと理解した白狼は、最終的にはウズメを口でくわえて高度を落とした飛島から飛び降りようとした。それを見かねたアナンとスヴェートが「しばらくここに停泊するから、目的を果たしたら帰ってくればいい」と言ってウズメを宥めてくれないければ、本当にそれを実行していただろう。

「食糧や日常品を仕入れるため、しばらく私たちはここに留まります。よろしければまた身を寄せてください」

そう簡単に告げたスヴェートに「かたじけない」と低頭し、白狼はぐずるウズメを背に乗せて旅立った。彼の言葉に甘えて、数日後またここに身を寄せても良いかと思案しながら。もしそうなるとしても、そのときには今とは全く状況も心境も変わっているだろうと、そんな臆気な確信を抱きながら。

そこからグナウー河の濁流に寄り添うようにして、二人と一匹は歩いた。グナウー河の土色の水はあの日の悪夢を想起させたが、その先にあるかもしれない希望を考えると、思い出したくもない記憶も払拭されるような気がした。

そして、茜色の残照の中、白狼はついに、目的の里の姿を見た。

その里のヌシは、里山の中腹の古沼に、質素な居を構えていた。

日はとうに西空の彼方に落ちていた。青草が生い茂る沼の淵に腰掛けて、彼女はその翡翠のような髪先から水の粒を滴らせていた。湿り気を帯びたその肌は、彼女がヌシを務める三種族の一つ、水の一族であることを物語っている。

「私は水伯。スイでいいよ。仰々しい名前は好きじゃないんだ」

実にさばさばとした口調で、ヌシ改めスイはそう告げた。沼の色合いと同じ、深草のような濃緑の瞳の中に、白狼の姿が捕らわれている。水草をまとわりつかせた細い体軀は、ウズメよりも幼いものに見えた。無論、外見は稚い童女であっても、彼女は幾星霜もの時を生きているのである。丸い瞳の奥に宿る理知的な光が、それを裏付けている。

「突然の訪問をしてしまい、申し訳ない。ここより遙か西、グナウ―河上流の里のヌシを務めておった、白狼と申す」

深々と低頭した後、白狼はその口にくわえた瓢をスイの前に置いた。まるで己の手のように沼の水を操り、スイはそれを器用に摘んで眼前へと持ってくる。

「……あの者達と同じ匂いがする。あんたが言いたいことは、大体分かるよ」

その袂から深紅の杯を取り出し、スイはそれをオキナへと投げて寄越した。瓢の口を開け、オキナが差し出した杯へそれをなみなみとつこうとする。

「六年ほど前、溢れた河の濁流に乗って、大勢の土の一族がこの地に流されついた。困っている人をわざわざ見殺しにする理由はないよね。あれから、彼らにはうちの里で過ごしてもらってるよ」

「……かたじけない」

「謝ってもらう必要なんて、これっぽっちもないよ。彼らはよく働くし、気性も穏やかでうちの里の者達と争いを起こすこともない。新しい技術も入ってきたお陰で、うちの里は少し豊かになった。こちとしては嬉しい限りだ」

袂からもう一枚の杯を取り出したスイは、それを自らつこうとした。自然な仕草でオキナはそれを手に取り、スイの器へと注いでやる。

「あんたは、彼らのヌシだったんだろう？」

杯を口に運び、どこか老成した笑みを浮かべた童女に、白狼は一つ頷いた。

「恥ずかしながら、力及ばず、里の者には不便を背負わせてしもうた。儂の代わりに彼らの世話をしてもらって、本当にありがたいと思っている」

紅色の杯を蔭の葉の上に置き、オキナはその両手を湿った地面の上についた。そのまま、額を地に擦り付ける勢いで深く頭を下げる。「はは、よしてよ。私は又シとして当然のことをしたまでだ」

頬を掻き、どこかくすぐったげにスイは片手を振った。

「こうしてわざわざ礼を言いにくてもらって、酒まで貰っちゃってそれで充分だ、私は又シとして、土の一族の者を迎え入れただけだもの。ささ、呑みなよ。余所の又シが訪ねてくることなんて滅多にないんだ、よければ又シ同土腹を割って話そうじゃない」

その細い指を瓢のくびれに這わせ、スイはオキナの杯に酒を傾けた。そのきめ細かな白い肌は、既に赤く上気している。

麓の方からは、温かな炎の光と、里人の喧噪が聞こえていた。かつて白狼の里人だった者達による、再会を祝した盛大な宴が行われているのだ。騒がしげな人声を背後に、スイと白狼はしばし物静かに美祿に浸っていた。

やがて白狼は、徐にその重い頭をもたげた。

「……スイ殿、そなたには迷惑をかけてばかりですまないが、もう一つ、頼み事がある」

重々しげなその声に、スイはその丸い瞳をぱちくりと瞬かせて顔を上げる。なんだい？ と呟くその口調は、軽妙ではあるもののどこか真摯な響きを漂わせていた。

「……儂が連れてきた幼子、ウズメを、この里に預けたい」

鮮烈な紅の瞳で稚い相手の姿を見据えながら、オキナは途切れ途切れにそう告げた。半ばまでつがれた杯を口元に運びながら、スイはその姿を眉一つ動かさぬまま見つめている。

「どうしてだい？」

喉を鳴らし、息を一つ吐いてから、スイは小首を傾げた。その語調に揺らぎがないことを感じ取り、オキナは言葉を続ける。

「ウズメには、あの災害のせいで、土の一族であるにも関わらず旅を強要させてしもうた。そのお陰で、あれの成長は極端に遅れておる。だから、もし、あれが過ごせる里があるのならば、出来ればそこに住まわせたいと、兼ねてから思っていたのだ」

ウズメの定住を妨げていた枷、『同じ匂いを持つ者がいなければ生きることが出来ない』という条件は、この里にいる限り解決出来る。この里の匂いが混じってしまったとは言え、同じ里出身の者が傍に居るのだ。何ら問題はあまい。

成る程、とスイは独りごつように呟いて、

「乗りかかった船だ、今更一人や二人里人が増えたところで、私は一向に構わない。……けれど、あんたはどうするんだい？ 流石に、自然が定めた掟だ、あんたも一緒に迎え入れる訳にはいかないよ。一つの里に又シは一人、それが世の理だからね」

その言葉が返ってくることは承知していた。白狼は瞼を伏せ、穏やかに笑みを浮かべる。

「ウズメを預かってもらえるのならば、儂はそれで良い。静かにこの里を去ることしよう」

白狼の旅の目的は、又シとしての最後の仕事として、ウズメの故郷となるべき里を探すこと、ただそれだけだった。もしその目的を達するのに、自分が枷となるのなら。何も言わずに去るという選択肢を、白狼は喜んで受け入れる。

「……けど、それじゃ」

白狼の真意を悟ったのか、スイは重苦しげな口調で言う。

「それじゃ、あんたが死んじやうよ？」

そんなこと、覚悟の上だった。

オキナは笑った。今まで彼が見せたことのないほど見事な、屈託のない晴れやかな笑みだった。旅の終わりがこういった形になることも、予想の範疇ではあったのだ。

虚勢ではない、晴れ晴れしい表情を携えて、オキナは口を開く。
「ウズメのために死ぬことが、儂の又シとしての、最期の仕事だ」

顔全体に、後悔をまるで見せない純粹な笑みを湛えながら、オキナはそう言い切った。

沼の波紋さえ静まらせるような、清冽な沈黙が辺りに満ちる。

「……そうだね、例えば」

手酌で酒を足しながら、スイは遙か下界の喧噪を見下ろした。

「あんたみたいに、たった一人里の民が生き延びたら 私も多分あんたと同じように、その子の為に生きて、その子の為に死ぬんだろうね。知ってるよ、又シってのはそういうもんだ」

赤味を帯びた幼い顔からは、既に輕薄な表情は抜け落ちていた。深緑の瞳を座らせて、スイは大きく息を吐く。

「いいよ、あんたの頼みは聞き受けた。あんたが又シとしての生を全うしたって言うのも、痛い程伝わった」

スイは自嘲するように笑う、

「あの子には、私の方から話しておくよ。あんたは、何の未練もなくこの地を発つといい」

強がるような、どこか儚げな威勢に塗れた言葉に、白狼は穏やかな沈黙を返した。その態度に白狼の心意を悟ったのだろう、スイは切なげに眉尻を下げて相好を崩し、瓢の口をオキナへと向けた。

「飲もうよ。あんたの里の酒は、本当に美味しい」

深紅の杯を傾け、白狼はスイの酌を受ける。

その水面に映った己の顔が、どこか吹っ切れたような穏やかなものであったことを感じ、彼はただ、ただ安堵に肩を落とすのだった。

スイと長く話し込んでしまったのがいけなかった。ウズメの監督をすっかり忘れていた。

白狼がスイの元から戻る頃には、夜月も南の空へと差し掛かっていた。随分話し込んだことだと焦る白狼の視界は、宴の中心で赤らんだ顔を弛ませているウズメを捉える。

へべれけになった里人の話し相手にオキナを残し、白狼はウズメの小さな体をくわえ、二人に提供された宿へと連れて行った。倒れ

込むようにして布団の上に寝転がるウズメを見、思わず嘆息したくなる衝動に駆られる。

これが、最後の夜だと言うのに。

「……うう、白狼様……？ おじじ様は、おらんのかの……？」

寝ぼけの末か酔いの末か、赤くなつた瞳を胡乱に細めながら、白狼の眼下でウズメは呻いた。その情けない様子に気落ちしながら、白狼はただ静かに首を振る。

白狼の仕草に、ウズメはそうかと言ひ、再度その薄い唇を閉じた。土壁の向こうから、未だ醒めやらぬ宴の喧噪が聞こえている。しばし考えるような間があつて、ウズメは徐に口を開いた。

「白狼様、白狼様じゃから言うが、……今宵のおじじ様、何かおかしくないかの？」

不明瞭な響きを帯びた、されど鋭いその言葉に、白狼はぴくりとその体毛を震わせた。背に植わる木イチゴを守るため、伏して眠るしかないウズメの視界には、その様子は映らない。

「何か、この里に入ったときから、すぐく物憂げと言うか心ここにあらずと言うか……。とにかく、何かがおかしいのじゃ。それなのに、ウズには全く何も話してくれん」

ウズメはそう言つて、隠そうともしない大きなため息を吐いた。

「おじじ様のお心は、ウズにはとんと分からぬ。うるさいし、融通がきかぬし、頑固だし。おまけに、何か一人で抱え込んで、ウズには全く相談してくれぬ。本当に、心配をかけさせるおじじ様じゃ」

どこか偉そうなその口調に、白狼は引きつったような失笑を零した。どちらが又シなのだろう、呆れ混じりにそう思う。

「……あんな、白狼様」

顔を伏せたまま、今までとは違う静かな語調でぼそりと呟くウズメに、白狼はぴくりとその耳を震わせた。小さな身体を布団の上に投げ出し、ウズメはごそごそと白狼から顔を背ける。

「……ウズはな、こんなことを言つてはおるが、おじじ様のことが大好きなんじゃ」

どこか照れたような言葉。

己の鼓動が高鳴ったのを、白狼はふと自覚する。

「おじじ様には内緒じゃよ。じゃから、ウズは、おじじ様にあんまり無理してほしくないんじゃ。おじじ様が何を考えてるのかは、ウズには知れぬ。けど、……おじじ様は、大切な、ウズの故郷の又シじゃから、の」

臃な口調は、やがて微睡みを帯び、曖昧な響きに変わっていく。

「……じゃから、ウズは……おじじ、様と……」

そこで、ウズメは力尽きたらしい。すうすうと小さな寝息が聞こえてきたのを、白狼はその耳で感じ取っていた。

小さな身体を放り出して、風邪でも引いたらいけない。その鼻で掛け布団をウズメの土塊の体に引っかけてやり、白狼は大きく息をつく。

自身の最後の民が、とても純粹な、愛すべき子として育ってくれて、白狼は誇りに思う。

彼女のためなら、この命を放り出しても惜しくはないと、白狼はそう痛感した。

無防備に眠る小さな身体を、愛おしむように目を細めて白狼はただ眺めていた。時折ひくつく細い指先が、温かみを帯びた長い白髪が、背に植わった鮮やかな木イチゴが、今はただ可愛くて、愛おしくて仕方がない。

優しい空気は、捨てがたく、白狼の脚を留めていた。

けれど、行かねば。

されど白狼は首を振り、そう思い直す。

この愛おしい子を、最後の里人を守るため、自分は最期の仕事をしなければならぬのだ。

白狼は顔を上げ、白い壁に囲まれた窓の外を垣間見た。何もかもを溶かすような暗夜のうちに五連の光が瞬いているのを見、白狼はふとその息を止める。

その下にあるのは、恐らく、白狼らが乗ってきた飛鳥だろう。

未練は残したくなかった。それならば、どう足掻いても不可能な形にこの縁を切ってしまうのが最良だろう。

遙か空の彼方、飛島の上に乗ってしまえば、地を這う土の一族のウズメは、己を追いかけにくることが出来ない。あの島に乗ってしまえば、完全に白狼とウズメの道は分かたれる。

それが、最上の選択肢だった。

もう一度ウズメに視線を送り、白狼は俄に相好を崩す。微かに寝息を立てる、愛しい愛しい最後の民の姿を、その瞼の裏に焼きつける。

さらばだ、ウズメ。達者でな。

心中でそう告げ、白狼は決然と歩み出した。

愛する民の幸せを願い、己の命を捧げるために。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0467z/>

土塊故郷行

2011年12月5日21時47分発行